



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2945号 2016.4.6 発行

社説：障害者対策 新法施行を差別なくす契機に

読売新聞 2016年04月06日

障害の有無を問わず、誰もが個性を尊重し合う暮らしやすい社会を実現する。そうした意識と行動を国民全体に根付かせる契機としたい。

障害者差別解消法が今月、施行された。行政機関や民間事業者に対し、不当な差別的扱いを禁じるとともに、障害者を手助けする「合理的配慮」を求めている。

日本が2007年に署名し、14年に批准した国連の障害者権利条約に沿った内容だ。既に約160か国・地域が締結している。

障害を理由にサービスの提供を拒否・制限したり、介助者同伴などの条件をつけたりする行為が、差別的扱いに該当する。

「合理的配慮」とは、障害者が直面する様々な障壁を取り除くため、負担が過重にならない範囲で対応することを意味する。

車いす利用者のためにスロープを設置するのが典型例だ。視覚・聴覚障害者のために点字資料や手話通訳を用意するなど、障害者の身になったきめ細かな取り組みを可能な限り広げたい。

健常者と全く同様に対処するだけでは、平等にならない場合も多い。移動や意思疎通を支える手段がなければ、障害者の行動は制約される。「合理的配慮」をしないのも差別に当たると明確にしたのは、新法の大きな特徴だ。

新法は、行政機関に「合理的配慮」を義務付けた一方、事業者については努力義務とした。ただ、交通機関や商業施設など、障害者が日常生活で接する事業者の対応が不十分では、新法の実効性は限られる。前向きな取り組みが望まれる。

国内の障害者は788万人に上る。高齢化の進展で今後、さらに増えるのは確実だ。障害者に対応したサービスや製品を提供していくことは、企業のイメージアップにとどまらず、経営上の大きなメリットになるだろう。

差別が絡むトラブルの解決には課題が残る。新法では、関係機関が連携してトラブル防止や解決の支援に当たる地域協議会の設置を自治体に促している。

都道府県での設置は進むものの、市町村では遅れ気味なのが現状だ。差別解消には、身近な生活圏での対応が重要である。

新法の成立から3年近くが経過したが、その趣旨が社会に浸透しているとは言い難い。

障害者に配慮したバリアフリー化の推進は、高齢者や子供連れの人にも恩恵が及ぶ。20年には東京パラリンピックも控える。政府は新法の周知に努めるべきだ。

障害者と恋 女子会や合コン…まず知ることから始めよう 斉藤寛子

朝日新聞 2016年4月6日

車いすの女性が恋愛経験のある女性に質問した。「エッチってどうやるの?」。囲む女性らが盛り上がる。障害がある人も、ない人もいる。20代の女性5人が東京都内のカフェで開いた女子会だ。

きっかけは「ユニコン」。障害者と健常者が参加するユニバーサルな合コンだ。多様な社会のありようについて発信を続ける市民団体「i（アイ）—l i n k（リンク）—u（ユー）」（神奈川県鎌倉市）が昨年から企画している。

企画は、大学院を卒業後、認知症のグループホームで働いた団体代表の高野朋也（29）が提案した。先天性の病気のため、車いすで生活する男友達から「恋がしたい。彼女がほしい」と聞いたからだ。



障害者と健常者が鎌倉の海岸や街を歩いて合コンを楽しんだユニコン=2015年10月、i—l i n k—u提供



人気デートスポットを半日、参加者10人ほどで散策して相手に思いを伝える手紙を書く。車いすを押したり、目や耳が不自由な人と会話をしたり、初めて経験するコミュニケーションも自然に生まれるという。

ただ、高野の理想からはほど遠い。これまで9回のユニコンに集まった健常者は参加者の3割にすぎない。多くが、高野の友人や友人の知人だった。

「人として何ができるか勉強したいと思った。恋愛がしたかったわけじゃない」。健常者の男性（37）は今年2月のユニコンに参加した理由を語る。

「自分たちの思いばかりが先行している」と高野も言う。ただ、参加者同士が友だちになり、車いすで入れる店を探すのが難しいこと、友人の手助けがあればもっと外出できることを知る機会になっていると思う。

■差し出した手 今も片思い

高野は昨年夏、一人の女性に出会った。脳性まひのため、車いすで生活する。お互いの仕事や趣味の話をしながら、彼女の笑顔や前向きさにひかれた。



放課後デイサービス 発達に支援必要な小中学生、遊びや創作で療育 五條に開設 /奈良

毎日新聞 2016年4月5日

「放課後等デイサービスあすなろ」の指導訓練室

社会福祉法人「五條市あすなろ福祉会」（櫻本旨代理事長）は1日、発達への支援が必要な小中学生を療育する「放課後等デイサービスあすなろ」を同市新町3に開設した。障害者福祉サービス事業所「あすなろ園」などの隣接地で、このほど完成式があった。

木造平屋約140平方メートルで指導訓練室、学習室、相談室を備え、遊びや創作を通じた活動などで支援を行う。定員10人。利用時間は平日午後2～6時、第2、4土曜日午前9～11時半、学校の長期休み期間中は午前9時～午後4時半。建物の一部に就労継続支援事業を行う作業所が入る。

「放課後等デイサービスあすなろ」（0747・24・2937）。【栗栖健】



障害者の駐禁除外標章、相次ぐ不正 家族「あればタダ」 荻原千明、中島嘉克

朝日新聞 2016年4月5日
大阪府警の集中取り締まり。警察官が標章の不正使用を確認した車に駐車監視員が「駐車違反」のステッカーを貼った＝2月22日午後、大阪市北区（ステッカーの一部にモザイクをかけています）



駐車禁止の場所にも車を止められるように



障害者に交付される「駐車禁止除外標章」。大阪府警が大阪・梅田で取り締まったところ、4割近くが不正に使われている実態が浮かび上がった。多くは障害者の家族によるもので、府警は対策を強化している。

大阪・梅田の新御堂筋。2月下旬、チケット制のパーキングに止めた車を府警の警察官が1台1台チェックしていた。ダッシュボード上に「歩行困難者使用中」と書いた標章があると連絡先を調べて電話をかけたたり、戻ってきた運転手に話を聴いたりする。一帯のパーキング・チケットで実施した集中取り締まりだ。

標章があれば60分300円のチケットを買わずに時間制限なく止められる。この日、標章を置いていた26台のうち14台（54%）は交付された本人が自宅にいるなどし、不正使用だと確認された。

ワゴン車に戻ってきた男性を警察官3人が囲んだ。男性に障害はない。「標章は弟のもの。弟を送った後、自分の用事で使ってしまった」と言い、駐車違反の青切符（交通反則切符）を交付された。

府警は昨年11月以降に集中取り締まりを5回実施。標章を置いていた計126台のうち47台（37%）に青切符を交付した。多くが家族による不正使用だった。

別の日、記者が同じ場所で取材していると、男性（44）が標章を置いてワゴン車から降りてきた。標章は寝たきりの60代の父親のもの。「父を病院に送り迎えするため」などとして交付を受けたが、この日は1人で買い物に来たという。「梅田は駐車料金が安い。標章があればタダ。みんなやってるんじゃないですか」と言って立ち去った。

障害者絵画展 新人が担う 募集から選考まで 久原本家グループ [福岡県]

西日本新聞 2016年04月06日
障害者の作品展を終えた昨春入社同期たち



1月にあった応募者の審査会
食品製造の「久原本家グループ」（久山町）は、障害者から公募した絵を商品発送用の段ボールのデザインに採用している。障害者の



の社会参加を支援するプロジェクトで、担い手は社会人となったばかりの新入社員たち。絵の募集や採用作品の選考まで一切の運

営に新人研修として取り組むユニークな試みで、障害者の創作意欲も刺激している。

福岡市・天神の県立美術館。「くばらだんだんアートの世界展2016」の最終日となった3日、県内外の障害者が描いた759点が並ぶ展示室に「お疲れさまでした」の声が響いた。1年前に入社した29人がプロジェクトの集大成を迎えた。大賞の5点が段ボールにデザインされる。

応募作をデザインした段ボール（2014年度のプロジェクト

同社がプロジェクトを始めたのは2011年度。1年サイクルで作品を公募し、毎年新しいデザインの段ボールを作る。15年度の絵のテーマは「大好きな人と食べたいごはん」。発案したのは昨年春に入社した若者たちだ。「食品を扱う会社として食べ物を外すことはできない」「家族とか人との関わりがほしい」。議論の末、昨年7月に決定した。

9月からは募集のためのチラシ作り。図案から文言まで自分たちで練り上げた。3千枚が刷り上がったのは10月。すぐに配布に取りかかる。福祉施設や特別支援学校などに outward に配った後も応募を促す電話をかけ続けた。

会社の未来を担う新人が一丸となって取り組んでいるにもかかわらず、プロジェクトリーダーの川又正昭さん（23）は「社内での認知度が低い」と感じた。自ら関わった体験のある若手社員を除けば、活動が浸透していない。そこでプロジェクトの中に「社内PRチーム」を結成。全国の17店舗に飾る作品を選ぶ「店舗賞」（10点）と、社員の投票で決める「社員賞」（同）を新設したところ「うちの店に合う絵を選びたい」「もっと多くの作品を見たい」などに関心が高まったという。

指導役を務めた同グループ人事課主任の荒木美幸さん（35）は「社内外の交渉を通じ、組織やチームとして行動する人材の育成に役立っている」と意義を語る。生徒が約100点を応募した県立古賀特別支援学校高等部の鶴野慎教諭（51）は「若い社員が責任感を持って運営する姿に好感を持った。生徒も楽しみにしている」と評価する。1年間プロジェクトを率いた川又さんは「結束し取り組んだ経験をそれぞれの職場で生かしたい」と話している。



家族代行サービスが好評 安城のNPO

中日新聞 2016年4月6日

家族の代わりに身元保証をしたり、本人の葬儀の手続きをしたりする安城市明治本町のNPO法人「えんご会」の家族代行サービスを利用する人が増えている。身寄りのない高齢者のニーズに応えた格好だ。代表の神谷邦子さんは「豊かな人生に少しでも貢献できる支援をしたい」と話している。

『責任を持って身元保証人になるから』と言ってくれた。私を全面的に受け入れてくれたことは今でも忘れません」



安城市内の福祉施設で暮らす七十代の女性は、えんご会の職員が訪問するたびに感謝の言葉を口にする。一年ほど前、神谷さんと出会い、えんご会の家族代行サービスの会員組織「めだかぞくの会」に入会。身元保証をしてもらい、施設に入ることができた。入院を控えた高齢者に身元保証の説明をする神谷さん（右）＝安城市内で

えんご会が家族代行サービスを始めたのは二〇一四年一月。主に西三河地方の身寄りがいない人や親族の世話を受けづらい人を対象に、入院時や賃貸住宅へ

の入居時に身元保証をしたり、緊急時に救急車の手配や入院手続きなどをしたり、喪主代行といった葬儀の手続きをしたりする。

一四年の契約者は二十人だったが、一五年の新規契約者は四十五人に増え、今年も三月末時点で十五人。契約待ちの人も十数人いるという。「安心して生活できるようになったという人が多い」と神谷さん。

料金は、登録料が十万～二十万円、身元保証が十五万円（別途管理費が必要）、葬儀支援が三十万円。ただし、生活保護受給者は登録料、身元保証のほか、葬儀手続き、永代供養まで含めて三万円程度と格安に設定した。

また、利用者の経済状況に応じて分割払いにしたり、分割で一時的に払えない場合は、翌月にまとめて払うなど柔軟に対応しているという。

神谷さんは「できるだけ皆さんの事情に合った対応を心掛けている。今後は行政や地域、民生委員との連携も深め、よりきめ細かい対応をしたい」と話している。（問）えんご会＝0566（72）6780（重村敦）

<えんご会>1999年に設立。障害者や高齢者を対象に食事作りや掃除などの家事援助サービスに取り組む一方、障害者総合支援法に基づき、日中一時支援事業やグループホーム・就労継続支援B型事業所運営などを行っている。職員10人、ホームヘルパー35人。

障害者の成年後見支援

読売新聞 2016年04月06日 鳥取

◇県初、西部に法人 保護者ら相談や研修

県西部の知的障害者らに成年後見制度の利用を勧める社団法人「あんしん後見せいぶ」が5日、設立された。米子市手をつなぐ育成会など障害者保護者団体の5団体を中心になって県内で初めて組織化した。21日に同市内で設立総会を開いて活動を始める。（大櫃裕一、高山智仁）

同法人によると、県西部で暮らす約2000人の知的障害者や発達障害者のうち、約1500人は成年後見制度を利用するのが適当だとみられるが、実際の利用者は200人と少ない。申し立て手続きの煩雑さなどの課題があり、同育成会や境港市育成会、もみの木家族会などの関係者が一昨年から支援法人の設立を協議してきた。

法人の活動は、成年後見制度を利用するための相談や支援、各種の研修、後見人候補者の育成など。市の養成講座を受講した法人役員ら制度に詳しい4人を中心に、少人数の会合を開くなどして説明する。

知的障害者の保護者で運営するため、人権問題や財産管理の悩み、定期的な見守りや生活支援の必要性などを、親の視点から指摘できるのが強みという。法人の理事長に就任した米子市手をつなぐ育成会の植村ゆかり会長（65）は「保護者も高齢化しており、将来を見越して複数の後見人を見つけておくことが必要」と話している。

設立総会は午後2時から米子市錦町の市福祉保健総合センター「ふれあいの里」で開催。正会員は入会金3000円、年会費3000円で、賛助会員（個人・団体）も募る。問い合わせは安木達哉・副理事長（090・1189・0794）。

県障がい福祉課によると、県内の知的障害者は5211人（2015年3月末現在）で、同様に成年後見制度の利用者は少ないとみられている。同課は「利用者にとっては、安心感や切れ目のない支援につながる取り組み。今後の活動に注目したい」としている。

◇成年後見制度 知的障害や精神障害、認知症などで判断能力が不十分な人に代わり、財産管理や契約行為などを行う制度として2000年に始まった。本人や親族、市町村長が申し立て、家裁が本人の判断能力に応じて支援方法、支援者を決める。

新事業所完成 障害者いきいき就労

河北新報 2016年4月5日

仙台市宮城野区の社会福祉法人「仙萩の杜びあ」は2日、運営する障害者就労事業所の

移転に伴う開所式を、同市青葉区の福祉プラザで行った。利用者ら約90人が出席し、新施設で元気よく働くことを誓った。

開所式で合唱を披露する施設利用者ら

ぴあは1日、若林区遠見塚から宮城野区日の出町に事業所を移転。弁当や魚介のくん製をつくり、販売している。佐藤耀代理事長は「施設が大きくなり、生産数を増やしていきたい」と話した。

ぴあは昨年11月、NPO法人「福祉ネットABC」を母体に設立。現在、NPO法人は県庁18階で「レストランぴあ」を運営している。



障害者が惣菜配達 新事業に300万円融資

河北新報 2016年4月5日

日本政策金融公庫仙台支店は、配達型社員食堂事業を今春始める一般社団法人「ぶれいん・ゆにーくす」(仙台市)に300万円を融資した。起業家支援に取り組む一般社団法人MAKOTO(マコト、仙台市)と連携した融資制度の活用第1号。

ぶれいん・ゆにーくすは自閉症や発達障害がある人の就労や生活を支援する団体。新事業は、企業の職場などに冷蔵庫と電子レンジを一体化した機器を置き、総菜を定期的に届ける。配達業務は障害者が担う。

融資を踏まえ、マコトは独自のクラウドファンディング「チャレンジスター」で不特定多数の人から資金を募集し、より厚みのある資金供給を目指す。

人工知能で障害者支援＝写真を音声説明＝米フェイスブック

時事通信 2016年4月6日

「2人、笑っている、サングラス、空…」と、音声で写真を説明する米フェイスブックの視覚障害者向けサービス(同社提供)

【シリコンバレー時事】インターネット交流サイト(SNS)最大手の米フェイスブックは4日、視覚障害者の利用を支援するため、人工知能(AI)を活用し、投稿写真を音声で説明する新サービスを導入すると発表した。

新サービスは障害を持つ社内の技術者らが開発。AIにより写真の被写体を認識した上で「2人、笑っている、サングラス、空、屋外」などと読み上げる。認識可能な被写体は、人や車、すしなど100種類程度だが、充実させていく。(



福祉車両の販売や修理 岐阜オカベが子会社設立

中日新聞 2016年4月6日

岐阜市で自動車販売や修理を手掛ける「OKABE GROUP」(オカベ)が、車いすのまま乗車できる福祉車両の販売や点検、修理に特化した子会社「福祉車両総合支援センター」を設立した。発達障害者の自立を支援する岐阜市の「光陽福祉会」の協力を得て、今月から事業を始めた。

車両に車いすを載せる操作を確認する岡部社長(右)と菊池会長＝岐阜市六条大溝の「OKABEGROUP」本部で



ワゴン車や軽自動車などさまざまなタイプの福祉車両を導入し、修理や車検時の代車や、レンタカーとして貸し出す事業をスタート。展示販売用の車も用意し、カタログでしか車を選べなかった購入希望者に、実車を見てもらえるようにする。

光陽福祉会によると、車いす対応の代車を用意できる修理工場が市近郊ではほとんどない。そのため菊池利哉会長（40）は「真夏にエアコンが壊れたままの車を使っていた。代車がないから、調子が悪くてもぎりぎりまで修理しないケースもある」という。

オカベは昨年八月、福祉会の利用者を受け入れて職業訓練をスタート。ひた向きに洗車作業をする姿に心を打たれた岡部泰雄社長（50）が、福祉車両の話聞き事業化を決めた。

高齢者や障害者の送迎などに福祉車両を使う施設や病院などから、点検や修理を一括して請け負う事業にも本格的に乗り出し、販売などと合わせて年間十億円の売り上げを目指す。福祉会からの助言を受けて進める。

岡部社長は「福祉車両の代車があれば、普段通りの生活を送ってもらえるはず。車の安全意識を高めてもらう取り組みもしたい」と話した。（宇佐美尚）

「正直、恥ずかしいです、つらいです」…乙武氏あいさつ

スポーツ報知 2016年4月6日

誕生会であいさつした乙武氏

作家・乙武洋匡（ひろただ）氏が5日、都内のホテルで40歳の誕生日を祝うパーティーを開催した。

パーティー中に行った乙武氏のあいさつの要旨は以下の通り。

みなさん、本日はお忙しい中、これだけ、これだけ、多くのみなさまにお集まりいただきまして本当にありがとうございます。心から感謝しております。

4月6日は40歳の誕生日です。本来であれば、みなさんに明るく楽しくお祝いしていただく予定でしたが、今回の不祥事によって、お祝いしていただくような立場ではなくなってしまいました。

この会を中止することを何度も考えました。しかし、本当に多くのみなさんから温かいメッセージを下さいました。「誰にでも失敗はある」「会えるのを楽しみにしているから」「こういう時こそ開催しよう」と言っていただきました。みんな応援をして後押ししてくれました。そうした声に支えられてきました。

しっかりとみなさんの前できちんと今回の騒動をおわびして、カツを入れていただく。そういう場にしたい、開催したいと決断しました。不謹慎とお考えの方もいるでしょうが、浮ついた思いではなく、明日から人生の後半戦。その再生の場となるよう、新たなに生きていく誓いの場とたく思いました。正直、恥ずかしいです、つらいです。しかし、前に進んでいきたいと思えます。足を運んでいただき、ありがとうございます。

今回、報道されているように、私は取り返しのつかないような過ちを犯しました。以前から、妻にはこうした過ちを打ち明け、謝罪し、妻が許してくれ、もう1度、夫婦として、家族としてやり直そうと言ってくれました。決して簡単に償えるようなことではありませんが、もう1度、夫婦として向き合い、歩んでいきたいと思えます。

先日から様々な報道がされています。多くは真偽が定かではない、虚偽を含んだものばかりで、大変困惑しております。もちろん私自身の不徳の致すところですが、誠心誠意、おわびしたいと思えます。事実ではないことで報道され、これ以上、家族が苦しむことはとても耐え難いことです。

「イメージからも障がいからも逃げて、自分も甘やかしてきた結果」…乙武氏あいさつ（その2）

作家・乙武洋匡（ひろただ）氏が5日、都内のホテルで40歳の誕生日を祝うパーティーを開催した。

パーティー中に行った乙武氏のあいさつの要旨は以下の通り。



乙武洋匡とは何だったのか。この2週間、いろいろ考えました。本当に多くの方のみなさんの期待を裏切ってしまったな、深く反省をしております。

2つあります。1点目は22歳、大学3年生の時、五体不満足が出版され、以来、明るくさわやかな「オト君」とのイメージを抱かれてきました。ごく普通の大学生活を送った私には、それが虚像で重荷に感じてました。自分はそうではない。そんな思いから、テレビ、新聞の取材を受け、くだけて柔らかい自分を強く打ち出すようにしました。ところが、そう言った部分はカットされ、「ああ、求められてないのだな」と。こうしたことが何年も続き、私は世間が期待する乙武を演じるしかなくなっていました。

しかし、私も生身の人間で、何とか本当の自分を分かって欲しい。そんな思いがプライベートの場で強く出てしまいました。堅苦しい真面目な乙武しか知らない皆さんは、親しみやすいね、とか、好意的に受け止めて下さる方が多くて、私はすごく心地よかったです。ああ、こうやって自分をさらけだしても受け止めてくれる人がいるんだ、と。もっと理解して欲しい、と。もっと自分を受け入れて欲しい。そんな思いで過剰な演出をしていくようになりました。しっかりと社会で求められる役割を果たす。そうした反動が弱さとなって出ていってしまいました。

もう1つは乙武さんと言えば、障害を乗り越えた強い人と言われますが、しかし、乗り越えられていなかったのだと思います。確かに私は五体不満足を出して、結婚して、しばらくこうした体に生まれ悲観したことはなく、思春期でさえ、親を恨んだことも、食ってかかったこともありませんでした。むしろ、こうした体でも感謝しておりました。

初めてつらいなと思ったのは、結婚して7年目。我が家に待望の長男を授かってからでした。あれだけ、待ち望んでいた子供に私は、何もしてやる事ができませんでした。オムツも替えられません。風呂にも入れられません。着替えも、泣いている我が子を抱きかかえて、あやすこともできません。

生後半年、ある夏の暑い日でした。長男がハイハイをして扇風機に近づき、指を入れそうになりました。危ない。そう思って息子を抱きかかえて、事なきを得るのでしょうか。でも、私にはそれができませんでした。

大声で妻を呼んだものの、揚げ物をして手が放せない。自分のこの短い手を差し入れ、体をひっくり返して長男を扇風機から引き離しました。受け身をできなかった彼はあおむけにひっくり返り、泣き出しました。そこに妻が来てくれて、「ヨシヨシ」と抱きかかえてあやしてくれました。その姿が、その光景が、本当に、情けなくて…。父親として何もしてやれない。これで父親と呼べるのか。

今まで障害を克服してきた乙武さん。そんな呼ばれ方をしてきましたが、家にいれば、自分が障害者、自分が無力の存在であることを突きつけられ、本当に惨めな気持ちになっていった。そこで私は家庭から逃げてしまった。ちっとも将来と向き合うことができなかつた。弱さです。自分の抱かれたイメージからも障害からも逃げて、自分も甘やかしてきた結果が、すべて今回のことにつながっています。

本当に情けない男です。しかし、そんな情けない男でも、もう1度、妻が期待をして信頼をしてくれました。2度と、同じ過ちを繰り返さず、弱い自分と決別をして、人生の後半戦をスタートしていきます。生まれ変わる、という言葉は簡単に口にできる言葉ではありません。それぐらい決意と覚悟を持って生きていきたいと思えます。もう1度、私を信じて、もう1度、期待をかけて下さる皆様のために、しっかり歩いていきます。ありがとうございました。

